

マーケット概況（2020年6月）

6月の債券相場は、10年358回債の利回りが前月終値から横ばいの0.000%で始まったが、日銀が5月末に公表した国債買入オペ運営方針で中長期債の買入額増加が示唆されたことでイールドカーブはスティープ化する流れとなった。2日の10年債入札は無難な結果となったが、ECBの追加金融緩和を受け、世界的な景気回復への期待から投資家のリスク許容度が高まったことで債券は売られ、5日には10年358回債の利回りは2020年3月以来となる0.045%まで上昇した。その後も米国雇用統計の非農業部門雇用者数が事前予想に反し大幅増加となったことで株高・債券安の流れとなったが、新型コロナウイルス「第2波」への警戒感から米株式相場が急落すると、本邦債券市場には買戻しが入り、12日には10年358回債の利回りは-0.005%まで低下した。16日の日銀金融政策決定会合で現状の大規模緩和策が維持された後は、新型コロナウイルスの感染再拡大への懸念から債券が買われる場面もあったが、7月からの国債増発が意識され、イールドカーブはスティープ化が進んだ。月末にかけても超長期ゾーンを中心に軟調地合いとなり、20年・30年・40年債の新発債銘柄は一時2019年3月以来の安値となった。結局10年358回債の利回りは0.030%で今月の取引を終えた。

<短国市場>

短国発行量が高水準で推移するなか、3M金利は概ね-0.10%を挟んだ値動きとなった。5日の3M912回債入札は前回比で発行額が1兆円増となり、需給不安から-0.09%台に上昇した。その後も-0.10%~-0.09%台での入札が続き、最終的に3M918回債は-0.093%で取引を終えた。一方、国庫短期証券買入オペの買入額が受渡日ベースで前月比7兆円増の月間12兆円に大幅増額されたことを意識して、6Mから1Yは月を通じて堅調に推移した。6M915回債は-0.230%、1Y916回債は-0.234%で月内の取引を終えた。

<一般債市場>

今年度初となったシ団方式の10年政保債は、2月以来となるスプレッド方式での条件決定となった。新発10年地方債は、前月比同水準の国債カーブ+13.0bpで決定した。いずれも底堅い需要に支えられて順調に消化され、既発債も政保債・地方債ともに良好な需給状況が継続した。社債では日銀による社債等買入オペの拡充を受けて中期債を中心に発行額が増加した。Zホールディングスをはじめとする大型起債が相次ぎ、発行ベースは同月で1999年以降の最高となる1兆9,050億円となり、前年同月比で減少傾向にあった4月、5月から急回復した。前月から継続して超長期債の需要も強いことから、発行年限の二極化が進行した。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#358	0.000(1日)	-0.005(12日)	0.045(5日)	0.030(30日)
#357	-0.010(1日)	-0.015(12日)	0.040(5日)	0.010(30日)
#348	-0.105(2日)	-0.110(15日)	-0.055(8日)	-0.105(26日)
#143(5Y)	-0.135(1日)	-0.140(1日)	-0.085(5日)	-0.100(30日)
#172(20Y)	0.350(1日)	0.345(1日)	0.415(30日)	0.415(30日)
#910-#915TDB(6M)	-0.195(1日)	-0.230(22日)	-0.160(9日)	-0.230(22日)
#911-#918TDB(3M)	-0.105(1日)	-0.125(18日)	-0.093(29日)	-0.093(29日)